



『源氏物語』 『アストレ』 作中詩歌拾遺

(補、古今・新古今和歌集)

高藤 冬武





はじめに

老人の眠りは浅い。夜半、小用に起きる、大方、以降ふたび寝入るは難し。床上、輾転反側、行く末なき身に胸中去来するものは専ら、来し方、胸底ふかく封をしたはずの憂しとも悲しとも恨めしとも迫りくる所業の思い出の数々。

「人間だれしも、死んでも、人に明かせぬ秘密の一つや二つあの世に持って行くものだ」、恩師のひと言、かつてなく真実みを帯びて思い出され、五指にも余るを抱え込んでいる我が身、暗夜、その「処遇」に悩む。

窮余の一策、羊の数ならぬ、暗記力に賭けてみた。闇雲の暗記の苦闘に神（しん）を集中、「古今、新古今」恋歌（八百六首）、「源氏物語」作中和歌（七百九十五首）、過去の怨霊悪魔払いに効を奏す。

暗記も暗記の段階に留まる限り、試験の一夜漬け、日数へず消える。これを海馬の領域に納めてはじめて記憶となる。そのためには、行住坐臥、余念なく、折に触れては反復暗誦、日課とした。古今、新古今二年半かけて達成、生涯の偉業と密かに我が身を称えたものであった。目下、源氏は三分の二まで。

さて、この間、前後して『アストレ』再読に取り組んできたが、作中詩歌の語句が、海馬の海に漂う和歌の記憶に行き逢うことしきり、あらためてその対応関係を当たってみた。

源氏を主としたが、足らぬところは古今、新古今に借りた。データベースに基づく学問的研究 (étude scientifique) とはおよそ縁なき、一老人の心の赴くままになせる慰みのわざ、すさびごとである。

『アストレ』 (L'ASTRÉE) 略解

フランス・バロック小説の嚆矢といわれる作品 (作者、オノレ・デュルフェ 1567-1625、全五巻1607-28刊)。舞台は五世紀中葉、ローマ帝国凋落

期の属州ガリア（現フランス）。美男セラドンと美女アストレの宮廷風恋愛の流儀に基づく田園牧歌小説、ロマン・パストラル。

二人は、両家の親の不和絶交から、交際も結婚も許されぬ仲、奸策を弄し親の目をくらましつつ密会を続けるが、横恋慕する男の、「セラドンには別の恋人がいる」との告げ口を信じたアストレはセラドンを永久追放する。セラドン絶望、入水、死体発見されず。ここから物語がはじまる。

実は、セラドン、下流で人に助けられ生存、宮廷風恋愛の掟に従いアストレの前に姿を見せるは絶対に許されぬこと。

バロック小説的紆余曲折の展開あり、女装し身分を偽りアストレの前に現れたセラドン、死んだセラドンの面影を漂わす相手に惹かれるアストレ、二人は緊密濃密な同性の友情で結ばれる。ガリア宗教ドルイド教の祭事、羊飼いの男女集まり共同生活を送る折あり、二人も参加、寝食を共にする。ここから物語の第二段、異様な男女の倒錯物語となる。これに前後する傍流として、バロック特有の波瀾万丈、超現実的事件、挿話が錯綜、時に二人これに巻き込まれ身を危うくしつつ、大団円、バロック小説の、ハッピーエンドに至り、三千百有余頁に及ぶ物語完結。

この物語、映画化されDVDもある、

監督、エリック・ロメール、原題 Les Amours d'Astrée et de Céladon、邦題

『我が至上の愛 アストレとセラドン』 2007年 109分。

恋歌比較

『源氏物語』と『アストレ』

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人の恋しかるらむ

古今、恋の巻二

秋の日の ギオロンの ため息の 身にしみて ひたぶるに
うら悲し

Les sanglots longs des violons de l'automne blessent mon cœur

むせび泣き 長い ヴァイオリンの 秋の 傷つける 私の 心

これほどの相似は稀だが、以下は、特定した作品に尋ね求め
たうちの二十例である。最初の四例は、花鳥風月。

1. 花、草木

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそ移らね

若紫 812 (国歌大観番号)

三千年に一度開花という瑞心華

Aussi, puis que mon cœur a reçu tel outrage, / Que ces myrthes
d'amour sont changez en cypres, / En cendres ses ardeurs, ses plaisirs en
regrets, / ...

今はた、受けし心痛いかばかりか、ミルテは糸杉に変じ、恋の
炎は灰に、愛の歡喜はもの恨めしき名残になり果てぬ。(ミル
テ、美神アフロディテの神木、愛の木. 糸杉、死、喪の木)

妃の座を占めんとやんごとなき連中を相手に、正にその効奏さんとするとき
王暗殺されて

2. 鳥

深山木に羽根うちかはしめる鳥のまたなくねたき春にもある
かな

真木柱 1176

意中の女、よその男に取られて 泣く音、妬し

Chers oyseaux de Venus, aimables Tourterelles, / Qui redoublez sans
fin vos baisers amoureux, / ... / Quand je vous voy languir, & trémousser
des ailes, / Comme ravis de l'aise où vous estes tous deux: / Mon Dieux,
qu'à nostre égard je vous estime heureux ! / De jouir librement de vos
Amours fidelles.

愛神の鳥、ゆかしき雉鳩よ、つきせぬくちづけうち重ね、...
恋の羽根がきももはがき、二心なき愛の歡びの人目はばかり、
嗚呼、羨ましくもあるかな、人はここまでは。

幼なじみに恋の告白、われは色恋に縁なき女とすげなければ、その帰る
さ、鳥の交歡を見て

3. 風、花の香

心ありて風のにほはす園の梅にまつ鶯のとはずやあるべき

紅梅 1351

父親（風）娘（梅）を 男（鶯）に嫁がせんとして

Doux zephir que je vois errer folatement / ... / Et qui pillant des fleurs les plus douces haleines / avec ce beau larcin vas tout l'air parfumant./ ... / Là tu pourras trouver sur des levres jumelles / Des odeurs & des fleurs plus douces & plus belles : / Mais rapporte les moy pour nourrir mes desirs.

見わたせば西風の甘きそよかぜ吹きまよひ、... いとなまめきたる花の香を掠めとり、えならぬ盗香あたりいちめん匂ひかよはせて、... 西風よ、吹きゆかば、我が恋人のふたへの花唇より、もれ出づる花と香の麗しく甘美なる、かしこにはあれ、吹き返し我に届けよ、欲情の糧とせん。

片思いの男、女の住む方を遠望、吹く風に想いを託す

4. 月

うき雲にしばしまがひし月影のすみはつるよぞのどけかるべき

松風 1057

源氏の須磨流謫

許され帰京

夜/世、男女夫婦の仲

La Lune c'est l'espoir qui croist & diminuë, / De vous seule empruntant les rais dont il reluit / Mais lors que sans lumiere elle erre dans la nuë, / C'est mon vague Penser qui sans raison vous suit.

月こそは満ち欠く恋の願ひなれ、願ひの光源は月ならぬ君にあれ、されど浮雲にまよひし月の影たえば、心も空に君のあとを慕ふは、うたかたの我が闇のもの思ひなり。

月をうち眺めつつ、男、つれなき相手を思いやりて

5. 冥界の河、三途の川

みつせ川わたらぬさきにいかでなほ涙のみをのあわと消えなむ

真木柱 1198

女は最初の男に背負われて三途の川を渡るといふ。玉鬘初めて源氏に求愛されて、背負われぬ先にと

O Dieux ! s'il est ainsi du destin estably, / Soit plustost qu'un Lethé,
pour le moins un Cocyte, / Fleuve plustost de mort, que fleuve de l'oubly.

あはれ神よ、命分のかくとしあれば、行かまほしきは、レテにはあらで、せめてはコキュトス、忘却の河よりは、むしろ死の河を。 ... レテ、冥界の河、この水を呑むもの前世の苦すべて忘れ極楽に渡る。コキュトス、罪人の涙からなる河。

父の命で恋人との仲ひき裂かれ、放浪、ローヌの急流に翻弄する船上で死に直面して

6. 墓、草の原、墓参

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

花宴 863

見知らぬ女と一夜を明かす。相手は源氏と知りながら自ら名乗らず歌を残し。

消ゆは女、尋ねは源氏

Peut-estre adviendra-t'il qu'un jour apres ma mort / Ma cruelle y vien-
dra conduite par le sort, / Allegeance tardive ! / Et que voyant gravez aux
arbres d'alentour / Les chiffres de nos noms, elle dira pensive, / Il avoit
de l'amour. / Pour certain il aymoît, dira-t'elle en son cœur, / Et lors amol-
issant ce rocher de rigueur, / Que pour cœur elle porte : / Elle regrettera
la perte de mon temps : / Heureux dans le tombeau, si pleignant de la
sorte, / Un soupir j'en entends.

おそらくはかくあらん、われ亡きあと、つれなき人よ、目に見
えぬ手にひかれ墓前に来たるべし、あなおそかりし情け心の、
わが手が樹々に刻みし二人の名の、連理の契りをうち眺め、し
みじみと心中ひとりごたん、かの人のおもひも恋ひも、うそ偽り
にはあらざりきと、すげなき岩垣の心の関の戸をひらき、、わ

が生きてありし時の絶えしを悔やみ、かく嘆きわぶる溜め息の
ひとつも聞かば、墓のなかの身ながら嬉しからまし。

相手の親が許さぬ恋のバルコンの下、連夜、男の哀歌

7. 神

恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

古今 501

Elle dit qu'elle m'ayme, ... / Mais que luy sert cela, si j'apprens tous
les jours / par de certains effects que ce ne sont que fables ? / ... / O par-
jures beautez, que vous estes coupables ! / Craignez vous point les
Dieux, pensez vous qu'ils soyent sourds, / ...

われを愛すといふ、... 言はずもがなの無げのことば、明け
暮れわれは知る、実なき仕打ちのふしぶしに、なべてかごと
の、嗚呼、罪ぶかき嘘いつはりの美姫、汝ら、神々を恐れぬ身
か、神を耳なしとでも思ふとや、... 。

同じ男、老婆を介し密かに哀訴の文、相手は真偽を疑い受け取りを拒む

8. 恋の煙、火

篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ

篝火 1144

Ma Diane, je te promets / Que le feu secret qui m'eflamme, / Malgré
luy ne mourra jamais, / Si l'on ne fait mourir mon ame. (luy : le Ciel qui
me hayt autant que je vous ayme.)

あが君、ディアヌ、誓ひて約す、身を焦がす下もえの火こそ、
君こふる我をあくまでも憎む天の怒りも何のその、絶ゆとも絶
えじ、我が魂を亡きものとされぬ限りは。

女のつれなきに絶望、入水せんとして

9. 魂、死

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

葵 888

源氏、妻葵を喪う。 「翡翠ノ衾寒クシテ誰ト共ニセム」、長恨歌に借りて詠む

(*Amour*) Ne croy point que mon cœur puisse estre rechauffé, / Le feu de ses desirs fut alors estouffé, / Quand la mort insensible en esteignit la flame.

愛の神よ、何しかは我が魂を、蘇息させんとす、思う勿れ、今はせんなし、我が心、再燃は難し、無情の死に心のほむら絶えしとき、胸の情火ともに消え果てぬれば。

恋人の死を痛み嘆く女の挽歌

10. 血涙

くれなゐに落つる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり

総角 1439

秘恋の相手の弔いゆえ喪服は許されない。かたみの色、濃いねずみ

Pleurez, mes tristes yeux, vostre gloire passée, / Soyent de gouttes de sang les larmes de mon deuil. / Oublions pour toujours le favorable accueil / Dont la fortune avoit nostre amour commencée.

涙していたく泣け、あはれ我がまなこ、汝の誉れ高き眼力は今は昔のこと、我が死喪の涙、血涙の雫ともなれかし、ねんごろなりき契りは、とはに忘れん、良きに巡りあひて逢初めとなりけるその契りは。

愛の契りとして贈られた御髪の腕輪を紛失、縁の切れ目かと眼を凝らして探し廻るが

11. 岩陰、人目

はるかなる岩のはざまにひとりみて人めおもはで物思はばや

新古今 1099

... si mon cœur ne peut / Celer du tout ma flame, / Loing bien loing
de chacun je m'en iray cacher : / Et ne descouvriray les secrets de mon
ame, / Qu'au plus secret rocher.

恋ひの火をついに隠しあほせぬ時しあれば、なべての人目よけ
つつ、遙か遠くへ逃げ隠れ、思ひのたけを洩らし明かさん、ほ
かならぬ人も通はぬ隠れ岩に。

親が許さぬ、近寄るな身を隠せと女から言われて

12. 花と妬み

はかなしや人のかざせる葵ゆるるしの今日を待ちける

葵 872

賀茂祭（葵祭）、葵をかざし愛の告白が許される。老好色女（源典侍）待ち受けるが、源氏の車に若紫既に同乗

Pres d'elle sur son lict un bouquet j'aperceus, / Que d'envie aussi tost
contre luy je conceus:/ O fleurs ! au pris de moy, que vous estes heure-
uses, / ...

臥す人のとこの上に、寄り添うごとく置かれたる、ひともとの花たばに目とまるや、またなく妬くも思ひしか、嗚呼、花よ、我をおし退け、なれば幸せものよ、... 。

花束に添えられた見舞いの艶書、誰からか筆跡から当ててみよと手渡されて

13. 恋苦共有

いかばかりうれしからまし諸共に恋ひらるる身も苦しかりせば

新古今 1221

Adieu donc, ... il faut que je flechisse / A la necessité qui m'esloigne
de vous, / Mais si vous partagez avec moy ce supplice, / Quel tourment
puis-je avoir qui ne me semble doux ?

さらばしばしの別れ、... 君がはなれ行く事が事なれば、何
をか言はん、肯なん、かへりてはこの苦しみを二身に分かち合
ふとあらば、なべて苦痛の嬉しくもあるかな。

父親の介護に赴く恋人との別れの歌

14. 岩の関

うらみわび胸あきがたき冬の夜にまた鎖しまさる関の岩門

夕霧 1305

執拗な求愛に女、塗り籠め（周囲を土壁で塗込めた寝室内の納戸）に鍵を鎖し終夜閉じこもる

Je puis bien dire que nos cœurs, / Sont tous deux faits de roche dure, /
Le mien resistant aux rigueurs, / Et le vostre, puis qu'il endure, / Les
coups d'amour et de mes pleurs. / ...

宜なるかな二人の心、いづれも堅き岩にこそあれ、わが心、
君がつれなきに頑と堪へ、君が心も、それなりに、恋のうづき
とわが涙を忍び ... 。

両家の親が仲違い、許されぬ恋、別の女を愛するふりをし人目を晦ます、
その仮初めの口説き

15. 鏡

怨みてもなきてもいはむ方ぞなき鏡にみゆるかけならずして

古今 814

孤燐依るところなく形影相弔するばかり、この寂寞荒涼たる思ひ（金子元臣評釈）

Dans son miroir elle-mesme s'admire, / ... / Et s'admirant, estrange nouveauté ! / D'un vain amour se brusle et se desire. / ... / Mais, glorieuse, en fin tu te deçois : / Cette beauté qu'en ce miroir tu vois, / N'est rien qu'une ombre, et n'est que dans un verre.

鏡の中の己が姿に見惚れつつ、... あなめづらしの今様やと、なほ見惚れつつ、むなしき恋に、こひこがれ欲情し、... されどわれぼめよ、いずれ幻滅せん、鏡に見ゆるこの美形、ただの硝子の中の影にこそあれ。

他愛心か自愛心かの議論の中で

16. 愛と潮の満ち干

千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬ
に

葵 871

君を思う心の深さは千尋の海の深さと言うを、浮気性のあなたから言われ
てもとの、返し

*Veillez comme moy bien aymer : / Amour vous le fera comprendre. /
Esperer et n'esperer plus / N'est-ce le flux et le reflux ?*

我がごとく恋をしものを思いみよ、さらば愛の神より諭しあ
るべし、恋の夢の満ち欠け、すなはち潮の満ち干にしかずと。

名だたる浮気男の言、恋は干満、心の波の干満に

17. 顔の美醜

ふるさとの春の梢にたづね来て世のつねならぬはなを見るかな

初音 1117

未摘花の鼻を見て、「さればよと、胸つぶれぬ」 花、鼻

Ou bien que j'ayme quelque jour / Longuement une laide femme, ...

あるは、ある日つかの間ならぬ恋をしも、醜女にせん、... .

万が一にも我が恋愛哲学（来ルモノ拒マズ、去ルモノ追ハズ、飽ケバ捨ツ）

に違わば

18. 山彦

打ちわびてよばはんこゑに山びこのこたへぬ山はあらじとぞ思
ふ

古今 539

Que feroit donc cet œil qui me desarme / Par sa douceur de toute sorte
d'arme, / Et qui promet m'aymer *infiniment* ? \Leftrightarrow *Il ment* ...

アンフィニマン

イルマン

眼指しの、何をせんとか、なまめく色と香に、常しへの愛と
契りし眼差しの言の葉に、護身の武具も無きものにされ。

\Leftrightarrow 眼は嘘をこそつけ。

女の目の魔力の虜となった男が、音無し逢瀬なき恨みを山にぶつけて山彦
の返事を待てば

19. 雪解け水

春風の吹くにもまさる涙かなわがみなかみもこほりとくらし

新古今 1020

吹くにつけても

Neiges de qui les eaux / S'escoulent en ruisseaux, / Pressé de mes
mal-heurs, / Mon cœur aussi s'ecoule tout en pleurs.

雪どけのみづ谷川となりて、流れゆき、愛恋の苦心の涙、瀬
とのみなりて流るる。

20. 春夏秋冬、季の優劣

心から春待つ苑はわがやどの紅葉を風につてにだに見よ
風に散る紅葉はかろし春のいろを岩ねの松にかけてこそ見め

乙女 1096-7

春秋優劣論. 寢殿造りの東と西の対に、中島に築かれた池を挟んで住む、秋好中宮と紫の上

L'esté, c'est le transport, dont le sang me bouillonne, / Et l'Hyver,
c'est la peur, qui me gelle en tout temps, / Mais que me vaut cela, si toujours mon Automne, / Est sans fruits aussi bien que sans fleurs mon Printemps ?

夏は狂乱、血潮わきかへり、冬は明け暮れ、わがみ凍てつく
恐懼なり。さりながら冬と夏、さもあらばあれ、花なきわが
春、実なきわが秋をし思えば。

『アストレ』引用詩歌出典

(1) III-308 数字は巻数、頁. STANCES, *Plainte de Daphnide*

sur la mort d'Euric.

スタンス エウリックの死を悼むダフニードの挽歌

(2) I-183 SONNET, *Sur les contraintes de l'honneur.*

ソネット 恥を知る人間の制約

(3) II-164 SONNET, *Il parle au vent.*

ソネット 風に語る

(4) II-382 STANCES, *Monde d'Amour.*

スタンス 愛の世界

(5) II-505 SONNET ソネット

(6) III-499 STANCES, *Qu'il mourra plustost, qu'il ne dira son*

Amour.

スタンス 愛を告ぐるよりむしろ死を急ぐべし

(7) III-501 SONNET, *Il se plaint qu'elle refuse ses lettres.*

ソネット 懸想文を拒む女への怨み言

(8) V-327 ODE, *Il veut mourir puisqu'il a perdu l'esperance*

de posseder Diane.

オード ディアナをわが物にせんとの夢むなしく死
を思う

(9) III-308 STANCES, *Plainte de Daphnide sur la mort d'Euric.*

スタンス 同上 (1)

(10) IV-243 SONNET, *Il ne veut plus esperer.*

スタンス もはやかくあれかしの欲もなく

(11) III-498 STANCES, *Qu'il mourra plustost, qu'il ne dira son*

Amour.

スタンス 同上 (6)

(12) III-281 MADRIGAL, *Sur un bouquet de fleurs aupres de*

Clarinte dans le lict.

マドリガル 床に臥すクララントと傍らの花束

(13) IV-536 STANCES, *Sur le desplaisir d'un depart.*

スタンス 別れの苦

(14) I-304 MADRIGAL, *Sur la ressemblance de sa dame & de luy.*

マドリガル 男とその意中の婦人の似かよひたる

(15) IV-250 SONNET, *Elle seule digne d'elle.*

ソネット 我が身に適ふは我のみ

(16) IV-78 STANCES, *Divers effects de son affection.*

スタンス 彼の人の愛情の効の種々相

(17) III-467 VILLANELLE, *Change d'humeur qui s'y plaira, jamais Hylas ne changera.*

ヴィラネル 心うつりはお気に召すままに、我イラス
の心は断固不変

(18) II-37 STANCES, *Echo.*

スタンス 山びこ

(19) IV-287 SONNET, *Il ne veut plus esperer.*

ソネット 同上 (10)

(20) II-382 STANCES, *Monde d'Amour.*

スタンス 同上 (4)

使用テキスト

Honoré d'Urfé, *L'Astrée*, Édition critique établie sous la direction de Delphine Denis, tomes I, II, III, Honoré Champion, Paris, 2011-2022.

L'Astrée, Nouvelle Édition publiée sous les auspices de la DINA par Hugues VAGANAY, tomes IV, V, Slatkine Reprints, Genève, 1966.

『源氏物語』、新編 日本古典文学全集（全六冊）、小学館、1994.

『源氏物語』、日本古典文学大系（全五巻）、岩波書店、1958.

『古今和歌集』、同大系、1958.

『新古今和歌集』、同上.

作品別詩歌・和歌総数

『アストレ』 185編

『源氏物語』 795首

『古今和歌集』 360首（恋歌、全五巻）

『新古今和歌集』 446首（恋歌、全五巻）